

京都府オリジナル酒米品種の省力施肥技術

近年の温暖化によって、水稻栽培では、一発型肥料[※]の早期溶出による減収や玄米品質の低下が問題となってきています。農林センターでは、府独自の酒米品種「祝2号」と「京の輝き」において一発型肥料による施肥管理について検討を行っています。

溶出期間や成分量の異なる肥料をシートで分けた区画ごとに施用して、各試験区の生育状況を調査しています。今後、収量や玄米品質を調査するとともに、伏見酒造組合と連携して酒造適性を評価し、両品種に適した一発型肥料を選定します。

※一発型肥料: 速効性と緩効性の肥料を組み合わせ、必要な肥料の全量を基肥として1回で施用し、追肥作業を省けるようにした肥料。



試験区毎に草丈、茎数、葉色を調査し、生育状況の違いを確認する

ニホンジカによる森林・林業への影響調査を開始

ニホンジカ(以下「シカ」)は、京都府のほぼ全域に生息し、近年、個体数が多い状況にあり、農林業に大きな被害を与えるとともに、森林の下層植生等の採食により森林生態系にも大きな影響を及ぼしています。

そこで、京都府では、生息密度や各種被害状況をモニタリングしながら、増えすぎたシカの捕獲や農林業被害の防除などの総合的な対策を進めています。

農林センター環境部、森林技術センター及び農村振興課では、林業や森林生態系への被害を広域的に把握するため、府内約360地点における天然林の下層植生衰退度調査及び人工林の剥皮^{はくひ}調査※を実施しています。

※下層植生衰退度調査:シカによる下層植生の採食や樹木の剥皮による森林生態系へ被害を調査

※人工林の剥皮調査:人工林の樹木の樹皮剥ぎなどの林業被害を調査(剥皮により、樹木の枯死や、木材の腐朽や変形などの被害が生じます)



下層植生衰退度調査の状況(下層植生の衰退が進んでいる森林)

早生青ナシ新系統の黒斑病抵抗性を調査しました

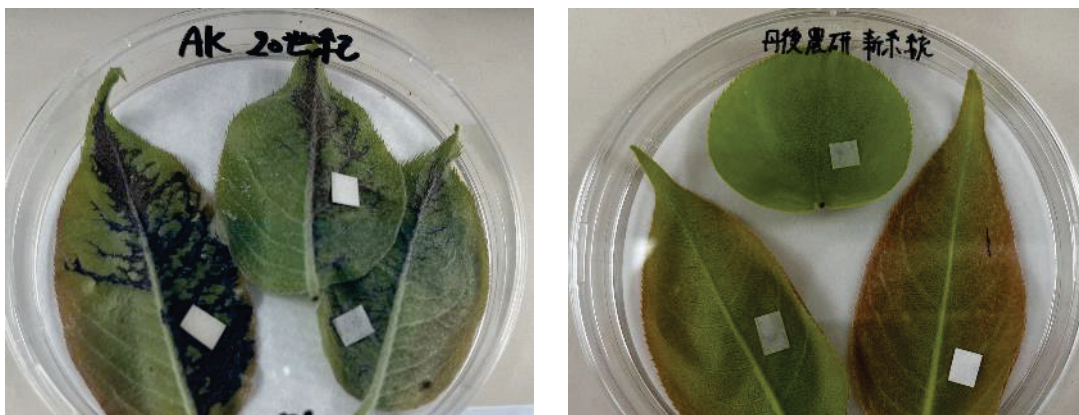
当所では、京都府で初めてとなる果樹の品種登録を目指し、盆前収穫が可能な早生の青ナシ系統を選抜し、その特性を調べています。

その中で、この系統の病害抵抗性を京都府立大学の協力を得て調べたところ、「二十世紀」より「黒斑病^{*}」にかかりにくいことが分かりました。病気にかかりにくいことから農薬の散布回数の削減が期待できます。

来年度まで、出願に必要となる特性調査を進め、ナシ独自品種として登録を目指します。

※黒斑病:葉や果実が黒すす症状となる病気。「二十世紀」は特に弱い品種。

果実は裂果や落下するため、定期的に殺菌剤を散布して防除する必要がある。



毒素の接種により、「二十世紀」(左)では葉の異常が広がりましたが、選抜した系統(右)では、きれいな状態を維持しています

茶業技術研修生の挿し木実習を実施

新しく茶園を開いたり古い茶園を植え替えたりするときには、遺伝的に均一な苗木がたくさん必要です。そのためチャでは、種子から苗木を育てるのではなく若い枝を切り取って育てる挿し木育苗法が確立されています。

当所では茶業技術研修生にこの育苗法を習得してもらうため毎年この時期に挿し木の実習を行っています。事前に研究員が挿し木育苗に関する講義を行った後、挿し木床の準備を行いました。さらに、挿し木当日は職員の指導を受けながら、せん定ばさみを用いて穂木から挿し穂を調整しました。

今後かん水やビニール被覆作業を行う中で挿し木育苗法が習得できるよう、指導を続けます。



挿し穂を調整



丁寧に挿し木を行う研修生

試験研究課題:黒大豆エダマメを栽培する大規模営農組織における

栽培技術体系の確立と販売力の向上

(令和6年度「産学公京もの新ブランド価値創出事業」)

黒ダイズエダマメの緑肥を用いた栽培試験を開始しました

府内の黒大豆エダマメでは、定植時から収穫時までハスモンヨトウなどのイモムシ類、茎疫病、黒根腐病などの立枯病が発生し、収量や品質が低下する被害が生じています。これら病害虫に対しては有効な防除薬剤が少ないため、生産者からは省力かつ効果的な防除技術の確立が求められています。

一方で、当センターでは、昨年、緑肥作物のヘアリーベッチをすき込んだほ場において、イモムシ類による被害が従来の栽培管理をしたほ場より少ない現象を見出しました。そこで、本年度は、緑肥をすき込むことによるイモムシ類に対する防除効果と、既に防除効果が確認されている茎疫病などの立枯病に対する防除効果について検証します。

6月26日には、当センターの黒ダイズエダマメほ場において定植作業を行いました。今後は、現地の試験ほ場と合わせて調査を行い、得られたデータに基づき、緑肥を用いた病害虫管理技術を確立します。



すき込む前のヘアリーベッチの状態



足元が悪い中での定植作業の様子
(6月26日)

京都府畜産技術業績発表会にて研究成果を発表

去る6月7日に、京都市内において京都府畜産技術業績発表会が開催され、畜産センター、家畜保健衛生所が畜産農家の経営改善と技術向上を目的として実施した調査や研究の成果を発表しました。

当センターからは「京都府独自のゲノム育種価解析手法確立に向けた小ザシ・モモ抜けの数値化方法の検討」、「畜産農家の多様なニーズや課題に対応した支援の取組」など5題について発表を行いました。

「京都らしいブランドを育成するための新しい評価方法の確立に期待する。」、「親身で綿密な支援に感銘を受けた。今後もきめ細かい対応の実施をお願いしたい。」などのコメントを助言者からいただきました。

当センターでは今後も畜産農家の課題解決につながる研究を行い、研究成果の社会実装に向けた取り組みを進めていきます。



小瀬農林水産部長あいさつ



発表の様子

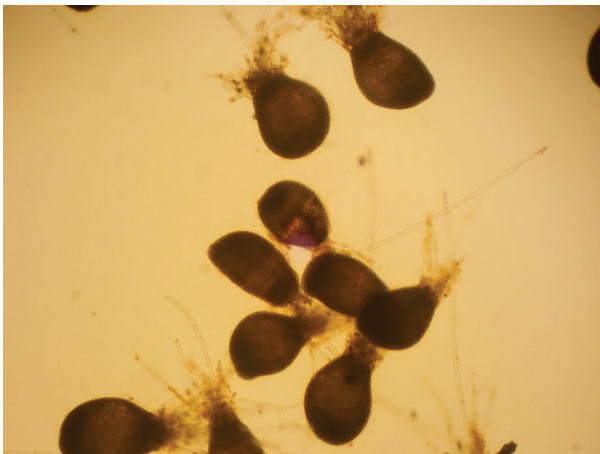
養殖アカモクの種苗生産が始まりました

海洋センターでは、漁業者に配布するアカモク養殖用種苗の生産とともに、効率的な種苗生産や養殖のための技術開発に取り組んでいます。令和6年度は種苗数5万本の生産と、種苗生産時における光条件が種苗の成長にどのように影響するか検証する予定です。

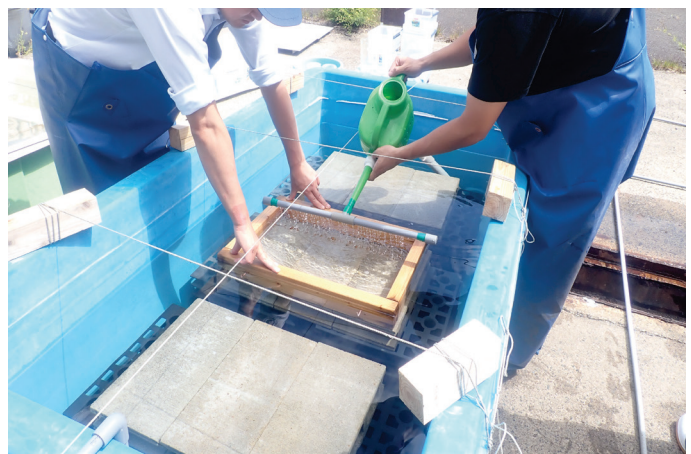
5月29日に冷蔵保管していたアカモク幼胚^{はしゅ}※を播種しました。この作業の開始から、漁業者に配布する9月下旬までアカモクの種苗生産は続きます。

また、種苗の歩留まりを向上させるロープなど、これまでの研究で得られた結果を漁業者に普及することで、安定した養殖生産が行われるよう、取組を進めます。

※幼胚：陸上植物における種のこと



種苗生産開始時の幼胚



アカモクの幼胚の播種風景